通勤の疲れ、小言もイヤ ふらっと入った「快感」が

面談室に夫婦を案内した。その時の夫婦の仕草で関係性がある程度分かる時がある。

今回のケースでは、二人を迎えた際、まず妻が最初に入り、私に軽く会釈をして、迷わず窓側の椅子に座った。後ろからついてきた夫は、入り口に近い残った椅子に。この日の夫婦面談の前に妻とは話し合っていたが、この二人の動作から、家庭では、何かにつけて妻の方が主導していると判断することができた。

「夫がパチンコ依存になって家庭が壊れそうです。どうしたらやめさせることができるのでしょうか」という、妻からの電話があったのは、ある平日の午後4時ごろ。妻がパートの仕事を終えてからだった。電話では状況を把握しただけ。3日後の面談を約束した。同じ平日で時間も午後5時。この時間設定が何を意味しているのか、やがて面談の中で明るみになるのだったが、初めのうちは気づかなかった。

パチンコ依存 第1回

――相談現場からの報告

柏木勇一
産業カウンセラー・家族相談士

いい表現ではありませんが、「のめり込み」という言葉があります。大衆娯楽として、健全化、適正化に取り組むパチンコ・パチスロ界にあっても、「パチンコ依存」は継続して取り組なければならない問題で、現在各団体が協力して対策を強化しようとしています。柏木勇一氏は、心の健康をサポートする企業のカウンセラーとして活動し、契約企業社員のメンタル面の悩みだけでなく、家族の様々な相談も受けています。パチンコ依存にからむ問題もその中の一つで、そのキャリアを生かして今号から、パチンコ依存「相談現場からの報告」を連載します。

少年野球で教え息子達も一緒に

妻は薄手の半コートを着て、都内のターミナル駅に近いビルの中の面談室を訪れた。隣県の自宅から1時間ほどかけて来たという。ふっとため息をつきながらも、少し照れ笑いをみせて、夫の依存状態を話し始めた。

相談者は妻だったが、当事者は夫。夫とも話し合いたいこと、できれば夫婦一緒の面談を実施したいと提案。お互いが納得して、日曜日の夫婦面談になった。二人の話と、その前の電話と面談による妻の話をまとめると、次のような経緯が明らかになった。

夫婦とも40代後半で同年齢。以前二人はあるメーカーの同じ支店に勤務。夫Aさんは営業職、妻は事務職。20年前に職場結婚した。妻は結婚と同時に退社しているが、勤めていた頃の知り合いが、総務部門を中心にまだ数人在籍していた。

結婚後、夫婦は支店近くに居住。ほぼ3～5年ごとに近県の営業所に異動を繰り返した。会社の通常の人事異動であることは妻も理解

していた。いつも通えない距離ではないという範囲だったので、マイカー通勤と営業車による外回りの日々。二人の男の子に恵まれた。相談時点で、長男は高校2年、二男は中学2年。

Aさんは、二人の子どもが小学生の頃は、少年野球チームの指導者として一緒に休日を過ごした。学生時代に軟式野球部に所属していた経験が生かされたという。しかし、子どもの成長と共に、その役割から離れた。

陶芸サークルの誘いは断ったが

2年前にAさんは都内の本社に転勤した。外回りの営業職がきつくなる40代に入ると何人かは管理職に、多くは総務部門への異動が慣例となっていた。業績も平均以上で、人柄も買われたAさんは本社総務部へ。しかし、この本社転勤に思わぬ落とし穴が隠されていた。マイカーから電車での通勤。入社20年後で初めて経験する1時間ちょっとの満員電車の毎日は、定時勤務ながら、心身の疲労を感じていた、とAさんは訴えた。

この本社転勤の際、Aさんは先輩から会社の陶芸サークルへの誘いを受けていた。二人の面談から夫婦の会話を再現すると―

夫「昔の支店にいたM先輩を知っているだろう」

妻「あの絵が好きな人？」

夫「そう。いま本社で福利厚生の責任者になってるんだ。その先輩から会社の陶芸サークルに入らないかと誘われてね。気晴らしがないと東京は疲れるからと」

妻「何よそれって」

夫「時間もあるのでやってみようかと思ってるんだ」

妻「ダメよ。結構お金がかかるんじゃないの。子どもたちの学費が大変な時期ぐらい分かってよ。固定給だけになって営業の時より給料が減ったし」

夫「金、かかるかな。会社のサークルなのに」

妻「のめりこんだら大変よ」

結局Aさんは先輩の誘いを断った。

勝った「大金」を追い求める毎日

都心に近い駅から本社まで歩いて5分ほど。不慣れな仕事と、会社での将来に戸惑いと不安を感じ始めていたAさん。家に帰っても、もう誰も相手にしてくれない。妻の小言も聞きたくない。休日もやることがない。そんな憂さを晴らすように、Aさんは、ある日の帰り、駅前通りの華やかな照明のパチンコ店に吸い込まれるように入った。学生時代には何度か遊びで通った経験があったが、当然、当時とは機械も仕組みも様変わりしていた。あっという間に3千円が消えた。それでも、スカットした気分は味わえた。週1回、負けてもこれぐらいの出費なら、まあいいか。毎晩のように酒を飲んで帰る仲間と比べたらまだましだ、と自分を納得させた。

2週間後、実際は始めてから3回目の夜、スタート直後から好調で、時間が経つのも忘れて没頭、3時間で5万円ほど儲けた。出費の何と10倍以上。Aさんにとっては月々の小遣いを上回る大金。もちろん過去2回の費用を簡単にカバーする金額だった。

こんなに簡単に儲かるのか。ひょっとしたら自分には才能があるのかな。Aさんが初めて味わう快感だった。古くなったテレビが買い換えられる。子どもの通学用自転車も。Aさんはわくわくした気分になっていた。

毎夕6時過ぎ定時に帰社。駅への足がパチンコ店に向かう日々が多くなっていった。しかし、簡単には儲からない。一日3千円までと決めていたが、いったんその限度を超えると、自分を抑えることができなくなっていた。

何よりもあの5万円儲かった実績と快感が、頭から離れない。そして時々は出費額より儲ける日もあった。「絶対に取り返せる。絶対に」という確信に近い思いが、とうとう毎日パチンコ店に向かわせた。

労金から始まり社から前借まで

妻から与えられている小遣いが底をつくのに時間はかからなかった。Aさんはまず労金から10万円借りた。月々の分割払いとボーナス払いで返済には余裕があると判断した。パチンコに使わなければ、という計算はできていなかった。あっという間にそのお金も消え、借金を繰り返した。何度目かの追加の借金は組合から拒否された。

Aさんは焦った。妻に白状して

しまえば楽になるかも知れない、と思ったが、妻から罵倒される場面が浮かび、できなかった。

「正常な判断ができなくなっていたんですね」とAさんは振り返った。

パチンコをやめることは考えなかった。必ず取り戻せる、という思いがこの段階になっても消えなかった。人事部にこっそり退職金の前借りを申し入れた。理由を聞かれて、どう答えたか思い出せないという。100万円申し入れ、とりあえず30万円借りた。

二度目の申請があった時、不審に思った人事部担当者は妻に連絡した。実は、妻は毎晩帰りが遅い夫に疑問を感じていた。何度か問いただしても「総務の仕事も昔よりは忙しい。まだ慣れないし。パソコンのスキルが弱いので、週1回は教室に通っている」という答えが返ってきた。家ではパソコンに向かっていないのに、嘘をついている、と妻は読んだ。

退職金前借りの話にびっくりしつつ、妻は、すぐには問い詰めなかった。何かある、私にも話せない何かがある、と直感した。

妻は追跡行動「みじめだった」

その直感が妻をある行動に走らせた。総務の仕事がそんなに夜遅くまで続くはずがない。会社を出た後どこに行っているのか。妻は、夫の行動を追跡することを決意したのだった。

この話は、私に対しては最初の二人だけの面談の時に打ち明けていた。

夕方6時過ぎ、本社が入っているビルの出入り口が見える道路反対側の建物の陰に隠れて待った。何人かが連れ立って帰社する中で、夫はひとりで出てきた。数メートル離れて後を追った。夫がパチンコ店に入った姿を目撃した。妻はすべてが分かったと思ったが、それでも毎晩とは信じたくなく、追跡行動は数回繰り返した。子どもの塾の費用のためのパートが終わるのが午後4時。子どもたちには、帰りが遅くなる手紙を残して都内に向かった。相談の電話をしてきた日の時間、面談を設定した時間も、追跡の行動と結びついた。

「みじめでした。こんなことをしている自分が恥ずかしくもありました」と妻は語った。

数日後の土曜日、妻は追跡の事実は隠して、人事部から退職金前借りの話を聞いたことを告げ、その理由を聞いた。Aさんは取り繕っても無駄だと観念し、パチンコ通いを告白した。100万円近くになっていた労金からの借金も白状した。

ここに至ってAさんはパチンコ通いをやめる決心をした。しかし、またいつか、結果として負けることは分かっていても、借金返済のために、高額の儲けを求めて店に入るかもしれない、と心は揺れていた。この依存状態から抜け出す方法があるのなら教えてほしい、という思いで妻に誘われて面談に同意した。

「妻の反対を押してまでは」

Aさんが依存症という病的領域に入っているかどうかは分からない。

診断する立場でもない。確かなことは、何とか解決したいという点で夫婦の考えが一致していることだった。

ひと通りの話を聴いた後で、私はパチンコ通いというテーマから離れて、主にAさんに質問した。こんなやり取りだった。

―少年野球の指導から離れた時は寂しかったでしょうね。

「ええ、まあ」

―子どもさんとは関係なく続けることはできたと思うのですが。

「そういう人のほうが多かったと思います」

―残念でしたね。

「もう過ぎてしまったことです」

―そうですね。過ぎたことと言えば、陶芸サークルを断ったことも心残りではないですか。

「妻の反対を押してまでは、無理でしょう」

―自分ではやりたかったんですよね。こうしたやりとりを聞いていた

妻は明らかに不満そうな顔をした。口を挟もうとした。私は妻と視線を合わせつつも、妻が口出しすることを避けるように、Aさんに語り続けた。

―家でのんびり好きなことができる時間があると、男は疲れが取れますよね。

「……」

―ちょっとしたことでも否定されるとがっかりするでしょう？家に帰っても面白くないし。

Aさんは苦笑いをした。

「自分の不始末は自分で片付けて」

ここで妻が話し始めた。

「この人は昔から自分の考えをなかなか話さない人でした。いろいろ口を出したのも家庭を考えてのことです。」

「借金の話が出たときは真っ白になりました。いまでもこれからどうしたらいいか分かりません。いっそ別れたほうがいいかとも考えました。この人は勝手です。自分の不始末は自分で片付けなさいと言いたいです。私や子どもたちには罪は無いですから」

「分かってるよ」と、夫は妻をさえぎり、「きょうはありがとうございました」と立ち上がった。

翌朝、私は妻に電話した。Aさんに対する妻のふだんの行動を非難するような発言をしたことを素直に謝った。妻の返事に驚き、そして安堵した。

「ゆうべ久しぶりに夫と話し合いました。珍しいのか、子どもたちもそばにきていました。そして私が詫びました。本当は夫を責めて怒りたかったのに。今からでもいいから陶芸をやってもいいよ、と話しました」と語ってくれた。そして「今夜も夫の会社に行って一緒に帰ってきます。偵察ではなく迎えに行きます。何回もここにきてあなたの行動は知っていたことを話そうか、それはまだ迷っていますが」と付け加えた。

「背後にある問題」それが分かれば

夫婦そろっての面談は1回だけ。私が試みたのは、相談者が解決したいという思いと、背後にある問題を切り離したこと。パチンコ依存状態に絞って「解決」することは簡単ではない。この夫婦の場合は、家庭に夫の居場所がないという「問題」が背後のあるのではないか。そこを夫婦、特に妻に分かってもらえれば、「解決」につながるかもしれない。そんな判断に基づいたアプローチだった。

その後2週間の間に夫婦と個別に電話で話した。

Aさんは「店の前を通っても中に入らない自分が不思議です。これまでが何だったのかなと考えますが答えが出てきません。依存症経験者の集まりに顔を出してみようと思っています。どんな話をしているのか聞きたくて」としんみりとした口調で語った。

妻は「パートの時間を延ばしました。まだ夫を完全に許してはいませんが…。上の子が進学しないで就職してもいい、なんて話してくれるのがいじらしくて。父親をどう思っているんでしょうね。サラ金には手を出していなかったのがせめてもの救いでしょうか」と語ってくれた。

柏木勇一（かしわぎ　ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はＥＡＰ企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。
厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士